【特別支援教育】

特別支援教育の理念

特別支援教育とは，障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち，幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し，その持てる力を高め，生活や学習上の困難を改善又は克服するため，適切な指導及び必要な支援を行うものである。

（文部科学省：特別支援教育の推進について（通知）より）

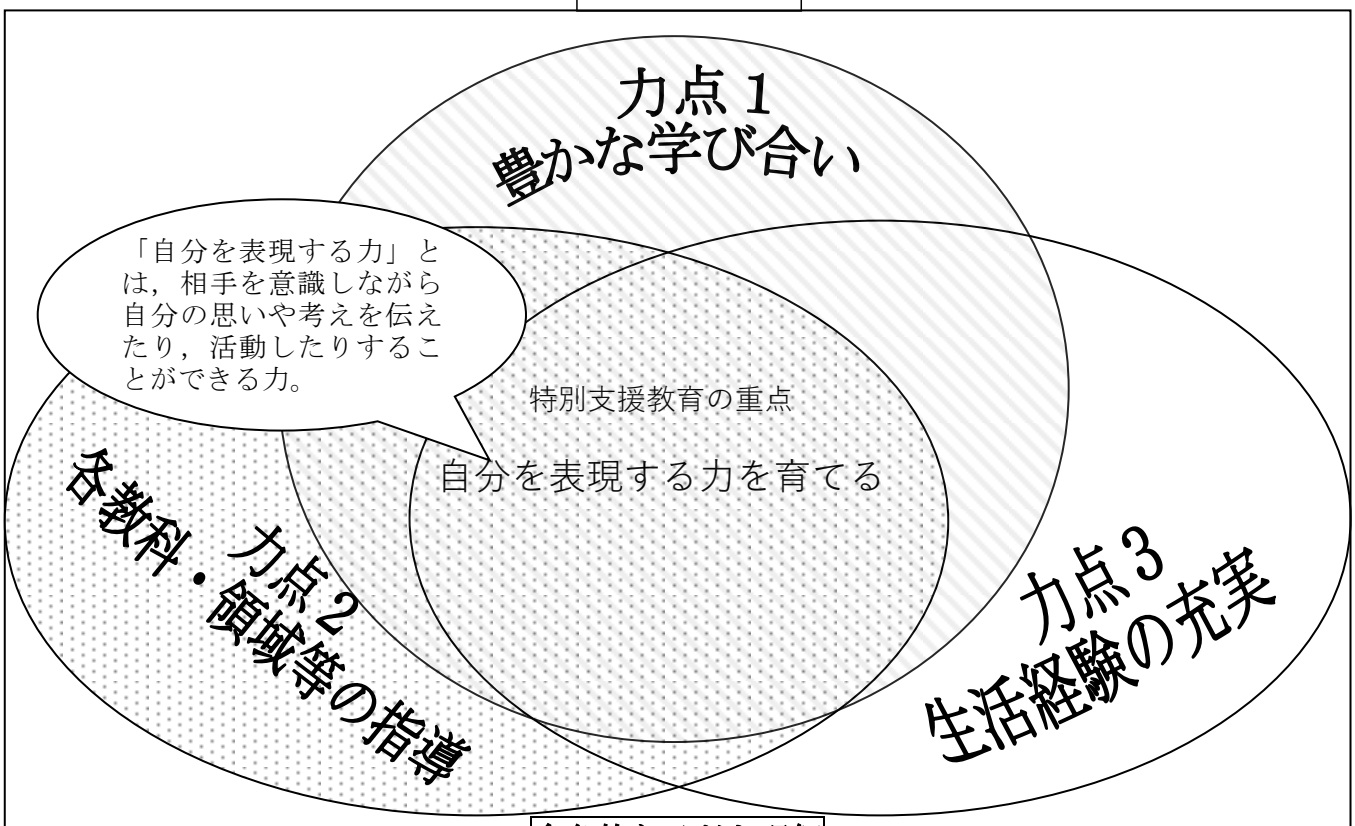
子どもの実態

- 上学年は，下学年に優しく関わることができる。
- 低学年は，高学年の姿を見て学んでいる。
- 興味・関心のあることには，意欲的に取り組むことができる。
- 学習に対して苦手意識がある。
- 集団の中での活動が苦手。
- 生活経験と言葉との結びつきが弱い。
- 感情のコントロールが苦手。
- 自分の言動に自信をもてない。
- 全体の流れに乗ることが難しい。
- 自分で考えて行動することが苦手。
- 話すことは好きだが，注意深く聞くことが苦手。
- 自分の思いや考えを相手にうまく説明することが苦手。
- 相手の気持ちを考えることが苦手。

特別支援教育のめざす子ども像

自分を知り，相手の良さを認められる子

「自分を知る」とは，子どもがもっている良さや課題を自分自身で認識することとする。また，「相手の良さを認められる」とは，相手の良さを見つけ，思いや考えを伝え合い，認め合うことで，お互いの良さに気付き合うこととする。これらを通して，生活および教科学習の基礎となる，個に応じたコミュニケーション能力の素地を養う。



多角的な子ども理解

- 個別の教育支援計画，個別の指導計画
- 複数の教師による日常生活での観察
- 特別支援学級および通級指導教室合同の教育支援会議
- 検査結果，アセスメントシートの活用

館山小の特別支援教育が考える『主体的な学び』,『対話的な学び』,『深い学び』

【主体的な学びを実現する子どもの姿】

学習の見通しをもち，自らの課題を解決しようと粘り強く取り組むことができる。

【主体的な学びを実現するための取組】

1．学習に安心・集中して取り組める環境づくり
2．子どもの興味を引き出す学習素材の工夫
3．視覚的に活動の見通しを持たせる工夫
4．子どもたちの「できた」を積み重ねるスモールステップの指導
5．ICT 機器の活用
6．次の活動への意欲を高める振り返り

【対話的な学びを実現する子どもの姿】

思いや考えを伝え合い，認め合うことによって，人と接することや新しいことを知る楽しさを実感できる。

【対話的な学びを実現するための取組】

1．ペア・グループ学習などの学習形態の工夫
2．子ども同士のアドバイスの言葉とその使い方（アドバイスルール）の指導
3．相手に伝わる話し方の指導
4．相手との関わり方の指導

【深い学びを実現する子どもの姿】

学習で身に付けた力を日常生活に生かそうとする。

・学習したことや体験したことを生かして課題を解決しようとしたり，主体的に生活を創造しようとしたりすることができる。

館山小の特別支援教育における３つの力点

【力点１】豊かな学び合い

１．学習形態の工夫

（１）個別の学習
- アセスメントシートや検査結果，保護者面談等を基に個別の教育支援計画，個別の指導計画を作成する。
- スモールステップで子どもたちの「わかった」，「できた」を積み重ねる。
- 子どもたちの実態や特性に合わせ，タブレットなどの ICT 機器を活用する。

（２）ペア・グループ学習
- 実態や特性を考慮したペア・グループの組み合わせを行う。
- 対話的に学ぶペア・グループによる学習場面を設定する。
- 一人一人の良さを発揮できる場を設定する。

（３）複数の学級による集団学習
- 複数の教師による多角的な実態把握を行う。
- 知的学級，自閉症・情緒学級それぞれの実態や特性に応じた合同学習を，活動に応じて設定する。

２．学びやすい環境づくり

（１）教室環境
- 実態や特性に配慮し，座席の配置の工夫や衝立の活用を行う。
- 掲示物は学習の内容に合わせて精選する。

（２）言語環境
- お互いが自分の気持ちを伝えたり，受け止めたりできる環境づくり。

【力点２】各教科・領域等の指導

１．各教科の指導

- 一人一人の教育的ニーズに応じた支援に主眼を置いた，意図的・計画的な指導を行う。

（１）個に応じたスモールステップの取組
（例）なかよし地図甲子園
マラソン大会・長縄大会

（２）具体物・半具体物の操作
（３）視覚的な支援
（４）学習の見通し
（５）適切な指示

- ３つの観点で，個の実態に応じた目標及び評価を行い，子どもの資質・能力を育てる。
  ①知識および技能
  ②思考力，判断力，表現力等
  ③学びに向かう力，人間性等

２．自立活動

- 個々の障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服のため，個別指導，集団での指導を行う。
- ことばの教室での指導
- ＬＡ教室での指導
- 難聴学級での指導

【力点３】生活経験の充実

１．日常生活の指導

（１）毎日の予定の確認
（２）身の回りの整理・整頓
（３）給食の指導
（４）朝の会・帰りの会
①日直のスピーチ・質問（５Ｗ１Ｈ）
②今日のニュース
③朝の活動
④今日良かったことの発表

２．生活単元学習

- 子どもが生活上の目標を達成したり，課題を解決したりするために，一連の活動を組織的に経験することによって，自立的な生活に必要な事柄を実際的・組織的に学習する。

（１）体験活動の充実
①ジャガイモ・サツマイモの栽培・収穫
②季節を感じる行事
③生き物を育てる活動
④さざ波交流会（市内特別支援学級交流会）
※令和５年度・オンライン実施

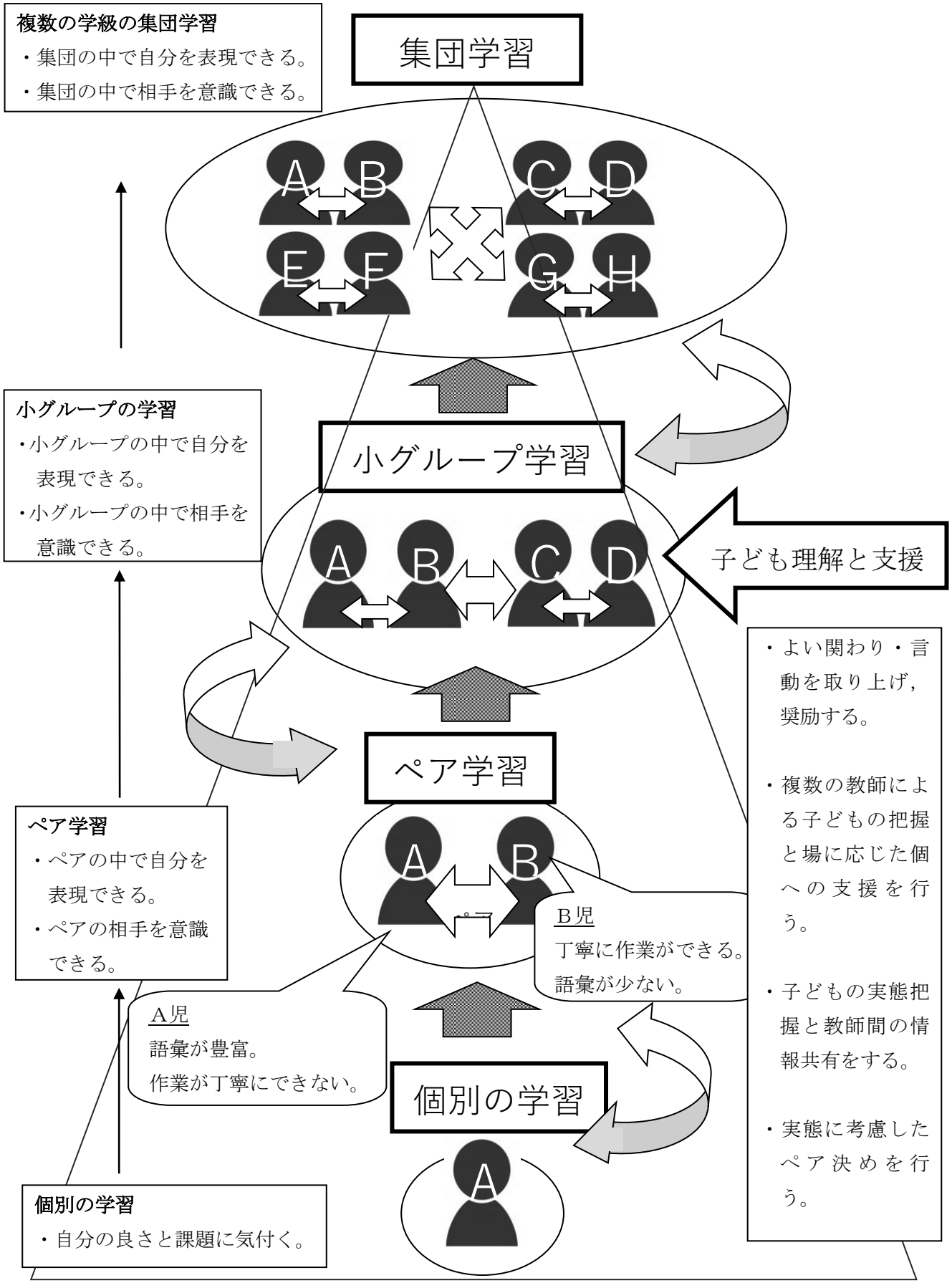
３．遊びの支援

- 遊びのルールを理解するために

４．リーダーの育成

（１）代表委員会への参加
（２）メダカリーダー
（３）遊びリーダー
（４）給食リーダー

学習形態の工夫


複数の学級の集団学習
・集団の中で自分を表現できる。
・集団の中で相手を意識できる。
集団学習
A
B
C
D
E
F
G
H
小グループの学習
・小グループの中で自分を表現できる。
・小グループの中で相手を意識できる。
小グループ学習
A
B
C
D
子ども理解と支援
・よい関わり・言動を取り上げ，奨励する。
・複数の教師による子どもの把握と場に応じた個への支援を行う。
・子どもの実態把握と教師間の情報共有をする。
・実態に考慮したペア決めを行う。
ペア学習
ペア学習
・ペアの中で自分を表現できる。
・ペアの相手を意識できる。
A
B
ペア
B児
丁寧に作業ができる。
語彙が少ない。
A児
語彙が豊富。
作業が丁寧にできない。
個別の学習
A
個別の学習
・自分の良さと課題に気付く。

【力点１】　豊かな学び合い

教師との一対一の学習だけでなく，学びやすい環境の中で，対話的な学びを通して，周りの友だちと関わり学び合うことが必要である。本校では子どもたちの豊かな学び合いを目指し，様々な取組を行っている。

１．学習形態の工夫

（１）個別の学習

日常の観察から作成した，アセスメントシートや各種検査結果，保護者を通じた医療機関との連携等をふまえ，個別の教育支援計画・指導計画を作成し個々にファイルを作って個別学習を行っている。また，他の学級と連携し日常生活の指導をしたり，子どもに応じた課題を作成したりして，日常生活や学習の指導を行っている。

また，個々の子どもの特性や課題に合わせタブレット型端末を利用している。短期記憶が難しい子どもに対してはカメラ機能やメモ機能を利用し，学習の補助に使っている。また，計算や漢字の問題を扱うアプリケーション等を利用し，関心と意欲を高めながら学習の習熟を図っている。『ことばの教室』においても，学習意欲の向上と理解を深めることを目的として，舌の様子を撮影して自分の舌の動かし方を見る等の活動を行っている。

（２）ペア・小グループ学習

ペア・グループ学習は対話的な学習を通して，個々のもつ良さを伸ばすことをねらいとしている。ペアやグループ決めは，お互いの良い面が発揮できるように，日常生活や学習の様子等の観察を基に行っている。一人一人に活躍の場があり，それを認め合えるペア・グループ学習となるよう支援している。

子どもの課題によっては，上学年が教える立場を体験することで，自分の成長を相手の様子から客観的に知ることができるよう，異年齢のペアになることも考慮している。令和元年度には，自閉症・情緒学級のみの自立活動で，集団参加やコミュニケーションに関する個々の課題を考慮して，異年齢同士でペアを組んだ。活動後のふり返りの場面では，子どもたちから「自分もこういうところがあるかもしれない。」，「昔の自分はこうだったかもしれない。」等の発言が出ることがあった。ペア・グループ学習は子どもたちが自分のことについて客観的に捉えることができる場であるとも考えられる。

【なかよしでの活動】

（３）複数の学級による集団学習

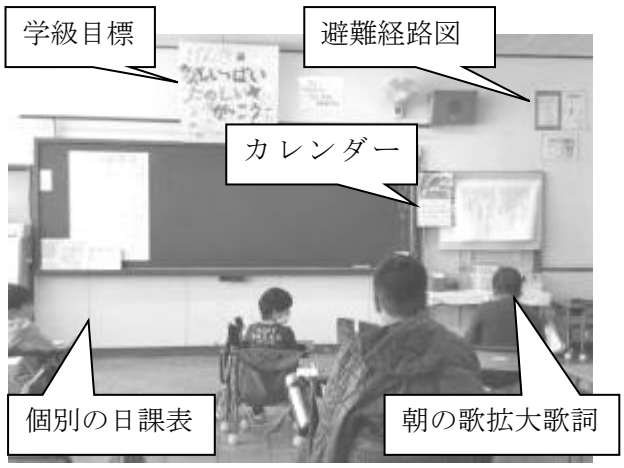
本校の特別支援学級は，通級による指導を行う『ことばの教室』２教室，ＬＡ１教室，特別支援学級『なかよし』の知的学級４学級と自閉症・情緒学級３学級，難聴学級１学級によって構成されている。

令和元年度２月まで，『なかよし』は朝の会や帰りの会，給食等の日常生活や特別支援学級の行事等において，全学級合同の活動を行ってきた。（今年度は感染症拡大防止のため，帰りの会と給食については休止中である。）それぞれの学級で培った個々の力を集団の場で活かし，子ども同士で認め合いながら，お互いの様々な面を見つめ直すことができる学習形態である。友だちの良い面や成長に気付き認め合うことで自己肯定感が高まり，周りの子どもにも良い姿が見られるようになっている。また，複数の教師の目で見ることにより，子ども理解が深まり，実態を共有することで，各学級での指導に生かすことができている。

２．学びやすい環境づくり

（１）教室環境

子どもの実態から意図的に座席の並びや位置を配慮することで，学習や活動に集中できる環境づくりを行っている。ペア学習に取り組む際には，日常生活の様子等から過度な刺激を与え合わないよう事前に教師が話し合い，ペア決めを行っている。机の配置等を工夫することで，子どもたちが気持ちを落ち着けて学習し，意欲をもって楽しく活動に取り組むことを目指している。



『なかよし』には，学習の場において様々なものに興味や関心が移ってしまう子どもがいる。子どもが学習に集中するために教室前方の掲示物を精選し，衝立を使う等の視覚的な配慮をしている。整理された環境の中で必要な学習内容を可視化することによって子どもたちの理解が深まると考えられる。『ことばの教室』でも，指導に不要な掲示物は子どもの実態に応じて見えないように配慮して学習に取り組むようにしている。

（２）言語環境

お互いが自分の気持ちを伝えたり，受け止めたりできる環境づくりをしている。子どもたちが，自分の気持ちを伝えられること，受け止めてもらえることの良さに気付くためには，その経験をたくさん積むことが大切である。そのため，まずは教師が子どもの話を「うん。うん。」「そうなんだね。」と共感的に聞くことで，子どもが安心して気持ちを伝えることができるようにする。個に応じて適切な言葉遣いができた際には，褒めたり認めたりすることで，相手の気持ちを考えた言葉遣いができるようにしている。また，子どもたち同士で称賛，受容，思いやり等が感じられる言葉が使われた時には，朝の会や帰りの会等を利用してなかよし全体や各学級に広めている。そうすることで，お互いが自分の気持ちを伝えたり，受け止めたりできる居心地の良い言語環境をつくっている。

【力点２】　各教科・領域等の指導

子どもたちが「わかった！」「できた！」と実感することができるように，一人一人の学習面，情緒面のニーズに応じた支援・指導を行い，学ぶことの楽しさを体感させていくことが大切である。また，個々の障害に基づく困難を主体的に改善・克服するために自立活動を行うことは，必要な知識・技能・態度及び習慣を養い，国語や算数等の教科学習の困り感の軽減にも繋がっていく。

１．教科指導

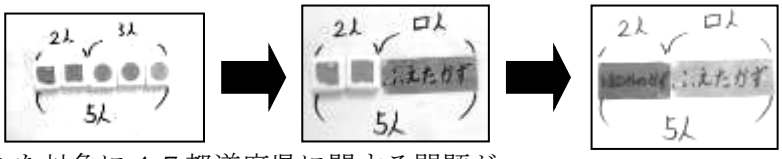
特別支援学級の教科指導は，一人一人の教育的ニーズに応じて行い，個々の学び方を大切にしている。例えば，視覚優位な子どもに対しては，言葉だけではなく，イラストや図でも表して説明したり，読みに課題があり，長音，促音，拗音でつまずきがある子どもに対しては，「多層指導モデルＭＩＭ」の手法等を取り入れたりしている。また，子どもの興味・関心を高めるために，学習素材も子どもの身近にある物を取り入れて行っている。

学習規律としては，子どもたちが学習に集中して取り組むことができるように，机上には「えんぴつ１本，消しゴム１個」を原則としている。

支援の方法は多種多様になるが，ここではその土台となる実践を紹介していく。

個に応じたスモールステップの取組

子どもたちは，障害特性もあり，一つの授業でたくさんのことを学ぶことに苦手意識をもっている様子が見られる。また，一人一人学習のつまずきは様々であるため，そのつまずきを補いながら学習を進めていく必要がある。そこで，単元を細分化したスモールステップの指導を行っている。例えば，テープ図の学習では，数図ブロックからいきなりテープ図に移行するのではなく，①数図ブロックのみ②数図ブロックとテープ図を併用③テープ図のみのように，子どもたちの思考の流れを細かく整理することが大切である。つまずきが見られた際は，前時の学習に戻る等，子どもに応じて柔軟に指導計画を変更していくことも大切である。



また，本校では４年生以上の子どもたちを対象に４７都道府県に関する問題が出題される「地図甲子園」が毎年２回実施されている。「地図甲子園」では，満点を取らないと表彰されない，というようにレベルが高く，特別支援学級の子どもたちの参加意欲につながりづらかった。そこで，スモールステップで取り組むことができる「なかよし地図甲子園」を実施している。なかよし地図甲子園では，書くことが苦手な子は口頭での回答でも良いことにし，地方単位で正解していくと級や段が上がる仕組みにしている。子どもたちが参加しやすく，「できた」を積み重ねることで，自己肯定感の向上，意欲の持続につながっている。「なかよし地図甲子園」は１年生から参加可能とし，短い期間では習熟を図れない子どもたちにとっては，長い時間をかけて取り組めるようになり，着実に力をつけられるようになっている。この取組を続けた結果，本校の「地図甲子園」の参加者が増えたり，社会科の学習への意欲が高まっている様子が見られたりした。

他にも，本校では校内マラソン大会や縄跳び大会を行っている。そこで，特別支援学級では，昼休みに練習に取り組み，子どもたちが交流学級で自信をもって運動に参加できるようにしている。学校のカードよりも易しい内容のステップアップカードを作成して活用することで，子どもたちはめあてをもって運動に取り組めるようになってきた。

【校内マラソン練習】【校内長縄跳び大会に向けた練習】

前年度から，本校で実施される「計算甲子園」に向けて，スモールステップで取り組むことができる「なかよし計算甲子園」も設立した。なかよし計算甲子園では，「１年生までで学習する計算領域テスト」～「６年生までで学習する計算領域テスト」といった段階を設け，子どもたちが実態に応じて自由にどの段階のテストを受けるか選べる仕組みとなっている。

計算甲子園

実施回数：年に１回。
内容：４年生までで学習する計算領域。

なかよし計算甲子園

実施回数：年に２回。
⇒再挑戦できることで，意欲を高める。
内容：１年生までで学習する計算領域
～
６年生までで学習する計算領域
の６段階あり，子どもが自由に選ぶことができる。
⇒テスト内容を選ぶことができることで，どの子どもも参加することができる。

なかよし計算甲子園に向けた取組

・朝の会後の５分間（チャレンジタイム）を使って，計算プリントに取り組む。
・全員が１年生で学習する計算領域のプリントから始める。
・プリントは，一つの単元ごとに初段，２段，名人といった難易度の異なる３種類があり，その３種類を合格（満点）すると，次の単元に進むことができる。

計算名人になろう
（　　）

	１年	合格欄
1	くりあがりのない１ケタ＋１ケタ	
2	くりさがりのない１ケタ－１ケタ	
3	3つのかずのけいさん	
4	くりあがりのある１ケタ＋１ケタ	
5	くりさがりのある２ケタ－１ケタ	
6	0のたしざんとひきざん	
	かくにんテスト	
	２年	
1	くり上がりのある２ケタ＋１ケタ	
2	くり上がりのある２ケタ－１ケタ	
3	くり上がりのない２ケタ＋２ケタのたし算のひっ算	
4	くり上がりのある２ケタ＋２ケタのたし算のひっ算	

前年度から実施して良かった点として，主に２つある。１つ目は，通常学級と生活の流れを同じにすることができる点である。なかよし計算甲子園は，火・水・金曜日，朝の会と１時間目の間にある「チャレンジタイム」に行っている。通常学級と生活の流れを同じにし，集中して学習に向かう姿勢を整えるためにとても良い取組である。

２つ目は，スモールステップで着実に計算の力をつけることができる点である。なかよし計算甲子園は，どの学年でも１年生の計算領域から始めるため「できた！」という自己達成感や成功体験の積み重ねができる。また，どこでつまずいているのかを自分自身で知ることができる。計算領域は前段階・前学年の内容の理解ができていないと，先に進むことが難しい。自分の苦手としている領域を知ることで，何を学習すべきなのか，どこまで学習すればよいか等の短期的なゴールが見え，前向きに学習に取り組むことができる。今後は計算領域に入る前の「数の合成・分解」等のプリントも用意するなど，より効果的な取組にしたい。

具体物・半具体物の操作

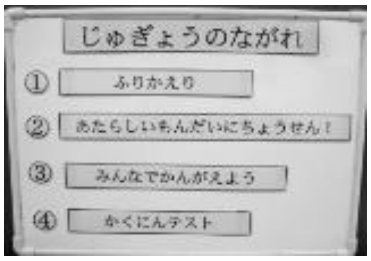
子どもたちの学習でのつまずきの主な原因は，概念形成がしっかりとされていないことだと考えられる。かけ算九九は暗唱できるようになっても，かけ算を使った文章問題になると分からなくなるのは，かけ算の仕組みが理解できていないからである。そこで，具体物の操作を多く取り入れた授業展開を行っている。例えば，かけ算の学習では，お菓子や数図ブロック等を使って，かけ算の式の答えを考える時間を多く設けている。また，日常生活にも活きるように，教師の意図的な働きかけで，縦に３つ並んだロッカーを一列（３×１）二列（３×２）三列（３×３）というように数えていく等の活動を取り入れることで，かけ算の仕組みが理解できるようにしていく。このように，具体物，半具体物の操作を多く取り入れることで，概念形成の確立へとつなげていく。

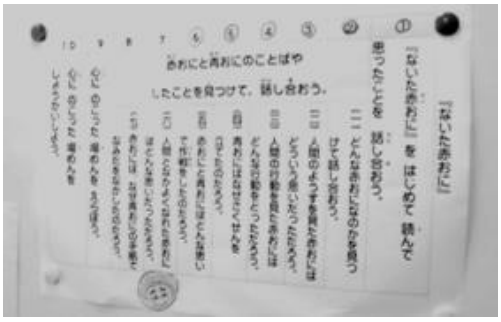
視覚的な支援

子どもたちは，生活経験と言葉との結びつきが弱いという実態がある。つまり，語彙が少なく，言葉だけの指示や説明への理解が難しいことが多い。そこで，視覚的な支援を多く取り入れている。例えば，国語の物語文の学習では，場面理解ができるようにするために， 挿絵を提示したり，大型モニターに画像を写したり，ペープサートで実際の登場人物を動かしたりするなどの活動を設けている。これらの手立てによって，言葉と絵，言葉と動きが結びつき，語彙の獲得にもつながっていると考える。

学習の見通し

子どもたちは見通しをもてなかったり，予定が変更したりすると，不安になって落ち着かなくなる様子が見られる。そこで，子どもたちが見通しをもって，安心して学習に取り組むことができるように，授業の始めに学習の流れを提示するようにしている。今何を学習していて，次にどんな学習をするのか視覚的に分かるようにしたり，単元ごとに学習の流れをパターン化したりすることで，安心して授業に参加することができるようになると考える。





【単元計画表】

適切な指示

子どもたちは，複数の指示を長い言葉で一度に受けると，情報を整理することに精一杯になり，行動に移せない時がある。そこで，「一指示一行動」の原則で，授業を進めていく。短い言葉で簡潔に指示や説明をすることで，すべきことが明確になり，子どもたちは集中力を持続して学習に取り組むことができる。また，一つの行動ができたら称賛し，再度次の指示を出し行動させることで，子どもたちは一つずつ「できた」という達成感を得ることができると考える。

２．自立活動

【身体の動きの課題改善】

自立活動は個々の学習上，生活上の困難を改善・克服するための指導を行う。自立活動は大きくは６つの区分（健康の保持・心理的な安定・人間関係の形成・環境の把握・身体の動き・コミュニケーション）に分かれ，その中から個々に応じた課題の改善を行う。例えば，すり足のように歩いて，よく物につまずいて転んでしまう子どもには，「身体の動き」の課題改善のために，ラダーやミニハードルのような障害物を用意し，足をあげて歩いたり，走ったりする練習

を行っている。

人間関係の形成やコミュニケーション能力を養うためには，ペア・グループ学習の場も設定することが効果的である場合もある。ソーシャルスキルトレーニングでは，ペアになることで，子どもたちがお互いの良い所や改善点に気付き，より良い学びにつながっている。一日の生活の中で繰り返し自立活動に関わる指導を行うことで，学習面や日常生活の課題の改善を目指している。

【ソーシャルトレーニング】

・<u>ことばの教室での指導</u>

『ことばの教室』では，主に構音障害や吃音等の指導を行っている。構音障害の指導においては，歪みや置換といった誤り方によって指導方法が異なる部分もあるが，指導の大きな流れは以下の３つである。

①口の体操や平らな舌の練習

正しい発音の精密な動きを獲得するために舌を巧みに動かせるような練習を重ねている。例をあげると舌先を口角につける，舌先で唇をなめ回す，舌打ちなどである。

平らな舌の練習は，歪みを改善する上で欠かせない練習である。舌を平らにするために舌をまっすぐに出すことや脱力することなどをスモールステップで練習している。平らな舌の練習するためにも舌の動きをよくしたり，筋力をつけたりすることは大切と感じているので舌の運動を取り入れることもある。

②聞き取りの練習

正しい音と誤り音を聞き分ける練習は，正しい発音を獲得する上で欠かせない。発音の練習が進んでくると自分の発音が正しいかどうかを聞き分け，誤っている場合は修正できるようにしていきたい。聞き取りの練習は発音練習を始める前から進めている。

③正しい音の練習

子どもの実態を見て，どの音の指導から始めるか，どんな方法で練習するかを考えている。練習は，単音節→音節の繰り返し（「キキキ」）→無意味音節とつなげる→単語→文→音読→会話といったスモールステップで進める。実態に応じてさらにステップを細分化することもある。指導が順調に進まない場合には，戻って練習することもある。

このような練習は，子どもの苦手なものを練習しているので，練習中は常に子どものできたところや良いところを「今のはさっきよりいいね。」など即時評価するようにしている。ＩＣＴ等を活用することにより，自分の舌の様子をすぐに映像で見て振り返ることができ，子ども自身ができたことや課題に気づくことができる。

また，指導中は図や模型，鏡などの視覚的な手がかりや聴覚的，触覚的な手がかりなど子どもが理解したり，意識したりできるようなヒントを与えることを心がけている。

さらに，構音指導でも吃音指導でも子どもたちが話したいことを話せるような雰囲気作りをし，話す意欲や自己肯定感を高めるような指導を大切にしている。そのため，毎回自由会話の時間を確保している。

【平らな舌の練習】

【正しい音の練習】

・LA 教室での指導

館山小学校では，令和４年度から LA 教室が開室された。LA 教室では，本人が得意なことを活かしたり，少しずつでも自分に合った方法で苦手な課題をやり遂げたりする経験を通して，自分の得意な部分に気付くとともに，自分に合ったやり方を用いればやり遂げられるという実感を積むことができるような指導を行う。

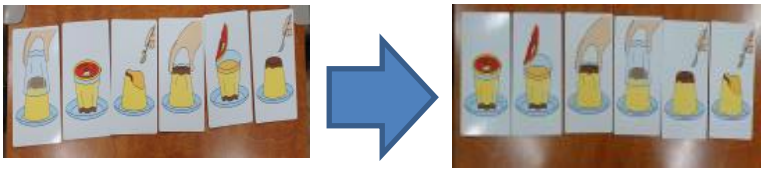
～通級による指導の内容として～

①話す練習

頭の中にある事柄を順序よく整理して，言葉で表現できない子には，キーワードの書かれたワークシートやカードを使って，頭の中にあることを時間の順序に並び替えて話す。

・簡単作文　「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「どうした」「どう思った」の雛形に整理してから話す。

・配列順番カード　６枚の場面カードを順序に気をつけて並び替えて，お話を完成させる。



【配列順番カード】

②書く練習

漢字を書くのが苦手な子どもには，１つの漢字をパーツに分け，組み合わせて漢字を作ったり，「へん」と「つくり」を組み合わせて漢字を作ったりして，形を構成する練習をする。

【漢字の組み合わせカード】

③聞く練習

注意深く話を聞くために，「さかさことば」で聞くトレーニングを行う。教師が「なは」と言ったら「はな」と子どもが答える。２文字から始めて３文字，４文字と文字数を増やしていく。

④読む練習

音読が苦手な子どもには，スリット（補助シート）を使って，どこを読んでいるか分かりやすく工夫したり，単語や文のまとまりで区切ったりして読む練習をする。

⑤計算練習

買い物ごっこを通して，料理に必要な食材カードを選び，購入したものを計算することで，繰り上がりやおつりの計算方法を練習する。

【食材カード】

⑥姿勢保持

日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持習得のために，正しい姿勢のチェックポイントを絵で示したり，バランスボールで体幹トレーニングを行う。

【バランスボール】

⑦視覚的な支援

活動の流れや時間を視覚的に捉えられるようなスケジュール表や時計などを活用し，見通しをもって行動できるようにする。

【タイムタイマー】

・**<u>難聴学級での指導</u>**

令和４年度から開設された難聴学級においては，主に「補聴器の使い方に関する指導」「きこえに関する指導の内容」「語彙を増やす活動」の３つを中心に自立活動を行っている。

①補聴器の使い方に関する指導の内容について

補聴器は精密な機械であるため，汗や湿気など少しの水滴でも壊れてしまう。そのために，定期的なメンテナンスが重要になってくる。また，将来自分だけで補聴器を取り扱うためにも，継続的な扱い方を知る必要がある。そこで，補聴器の電池残量チェック，エアブロワーによるチューブの掃除，イヤーモールドの拭き取りなどを，一人で行えるように練習をしている。

【補聴器・カバー・イヤーモールドとチューブ・電池】

②きこえに関する指導の内容について

難聴児が生活する上で，自身の聞こえにくさについての障害理解を深めたり，友達とのコミュニケーションの取り方を知ったりできるようになることが大切である。そこで，きこえにくさから生じる経験や難聴児の抱えている気持ちなどが書かれた『難聴理解カルタ』を用いている。「わかった？って聞かれたら思わず『うん』と言っちゃうの」などが書かれた読み札を見ながら，教師と一緒に自分の困り感について振り返る場を設定している。また，友達に自分の困り感を伝えるとき，どう言えば良いのかなどを考える時間もとっている。

【難聴理解カルタ】

③語彙を増やす活動の内容について

語彙を増やす活動としては主に，言葉集め，オノマトペカード，視覚的支援を中心に行っている。

言葉集め

アのつく言葉，エのつく言葉など，調べる言葉を毎時間決め，タブレットや国語辞典で調べている。知らなかった言葉は意味を調べ，新たな語彙として獲得できるようにしている。

オノマトペカード

カードのイラストからオノマトペを想像したり，オノマトペと合致するイラストを組み合わせたりする活動を通して，表現方法を豊富にできるようにしている。

【オノマトペカード】

視覚的支援

難聴児は，自然と耳から入ってくる情報が少ないことがあり，生活経験の中で出合わない言葉は，覚えることが難しい。そこで，イメージをもつことができるように絵カードを提示したり，動物の鳴き声などが分かるように音声と映像を提示したりする支援を継続的に行っている。

また，難聴児は正しい発音を聞き取りにくく，発音が間違っていても自分で気づかずにいることがある。その際は，黒板やホワイトボードに正しい表記を書いて，正しい言葉と発音を覚えられるよう練習を重ねている。その他にも，ことわざや歴史人物，国名などいろいろな種類のカルタを用意し，楽しく遊ぶ中で，正しく聞き取る練習や，様々な言葉に触れることができるような時間を作っている。

これらの活動を通して，様々な言葉を覚える中で，絵日記や作文，対話などで新たに覚えた言葉を活用できるように支援をしている。

３.教科指導との関連と評価

上述の自立活動で培った力は，教科学習の土壌となる。各教科においては，「何ができるようになったか」を明確にするため，①知識・技能 ②思考力，判断力，表現力等 ③学びに向かう力・人間性等 を３つの柱として，子どもの資質・能力を育てる。これらは，個別の指導計画をもとに実施され，以下の表に示す手立てで評価する。

支援学級日課上の表記	基本的な学習形態	目標	評価方法	評価時期
生活単元学習	個・ペア・グループ・一斉	個に応じた課題	観察（行動・発言）・ワークシート	毎時・単元末
自立活動	個・ペア・グループ・一斉	個に応じた課題	観察（行動・発言）・ワークシート	毎時・期末
国語・算数等の教科	個・ペア・グループ・一斉	個に応じた目標 教科の目標	観察（行動・発言）・ノート・ワークシート・ワークテスト	毎時・単元末

【力点３】　生活経験の充実

子どもたちにとっては，きめ細やかな支援と共に様々な体験を通して生活経験を充実させていくことが大切である。また，生活面を整え，学校生活全体を通して豊かな経験をすることは，学習面にも大きな効果があると考えている。本校では生活経験の充実に向け，個に応じた合理的な配慮を行いながら，自主的に活動できる学習環境作りを行っている。

１．日常生活の指導

（１）毎日の予定の確認

特別支援学級担任は，複数学年の指導を一人で行っている。そこで，子どもたちに合わせた指導をするために，週が始まる前に交流学級の週指導計画をもらい，それを基に特別支援学級での計画を立てている。また，子どもの自主性と計画性を育むため，交流学級の予定の確認を子どもたち自身で行うようにしている。始業前に個々が一日の予定表をバインダーに挟み，予定を確認するために交流学級に向かう。交流学級担任に予定を訊いて，それを予定表に書き写して特別支援学級に戻ってくる。一日の流れがわからないことで不安感をもつ子どもにとって，予定の確認が自分でできることは，安心して学習に取り組めることに繋がっている。週の予定と異なる場合，『なかよし』側の担任は日課変更が把握しやすくなり，交流学級側の子どもたちは安心して一日の見通しが立てられるという利点もある。

社会生活を営む上で自主性と計画性を育むことは重要な目標である。一日の見通しをもつことにより，自分で準備や行動ができる子どもの育成を目指している。

（２）身の回りの整理・整頓

【持ち帰るもののカゴ】

特別支援学級では片付け方について声かけだけではなく，子どもたちが片付けやすい環境をつくることを心がけている。例えば，個々に複数のロッカーを用意し，荷物の整理整頓をしやすくしている。学習に必要な道具類を分類し，決まった場所に整理することで，どこに何があるのかがわかりやすく，自分から必要な道具を取りに行ったり，準備をしたりして，学習を進めることができている。準備や整理ができた場合には称賛することで，身辺の整理・整頓に対する意欲の向上を目指している。また，整理・整頓が難しい子どもは，ものの置き方等を写真で示し，それを見ながら片付けられるようにしている。また，全学級で宿題や連絡帳，たより等家庭に持ち帰るものが一人で準備しやすいよう，所定の位置にカゴを用意し，そこに入れたものは毎日すべて持ち帰ることを習慣化している。

【ロッカーの置き方の掲示】

（３）給食の指導（感染症対策のため，令和２年度から活動内容縮小）

【給食準備の様子】

上の学年の子どもが下の学年の子どものお世話をする際に，子ども同士の助け合いや責任感が生まれる。給食は，特別支援学級の異学年混在という特徴を生かすことができる活動である。食器等の片付け後の運搬を全員が分担して行う際に，子どもたちは感染防止に気をつけながら，互いに声をかけ合って助け合っている。箸やスプーンの持ち方や食事のマナー，食に関する話題の共有を行い，ことばの教室の担任も給食指導に携わることで，舌の動きに関わる噛むことの指導，

ストローの使い方の指導等も合わせて行う。

【給食の片付けの様子】

（４）**朝の会・帰りの会**

【朝の会の取組】

月	火	水	木	金
全員で集まって 朝の会	各学級で チャレンジタイム	各学級で チャレンジタイム	各学級の取組	各学級で チャレンジタイム

＊チャレンジタイムについては，特－８に記載。

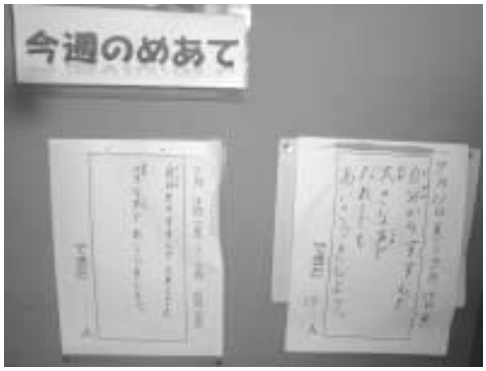
毎週月曜日は，知的学級・情緒学級の子どもたちが一つの教室に集まり，全員で朝の会を行うようにしている。全員で集まって朝の会を行うことで，特別支援学級内のリーダーの育成や組織化，複数の職員の目で子どもたちの実態や困り感を見ることができる。

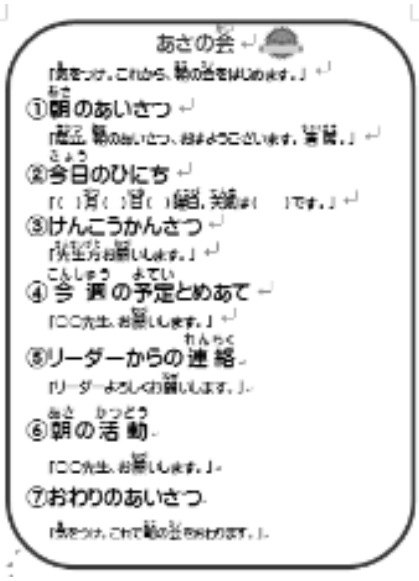
①今週の予定とめあて

今週の予定を週の始めに確認することで，子どもたちは見通しをもって１週間を過ごすことができる。

今週のめあてでは，１週間続けて頑張ることを子どもたちと一緒に確認する。（めあてについては，前の週に子どもたちの様子を見て，職員全員で話し合って決める。）めあてについても，子どもたちが取り組みやすいように，スモールステップにしている。例えば，あいさつのめあてであれば，「大きな声であいさつをしよう。」⇒「大きな声でだれとでもあいさつをしよう。」⇒「自分からすすんで大きな声でだれとでもあいさつをしよう。」のようにした。

特別支援学級全体でこのような取組をすることで，子どもたちの意識も高まり，始めは小さい声でしかあいさつができなかった子どもも，徐々に大きな声であいさつをすることができるようになってきた。めあてに対する評価も全員でするようにし，今週のめあてを伝える前に，先週のめあてを守ることができたかを確認している。できた人の人数も記録して廊下に掲示することで，子どもたちの意識をより高めることができた。




あさの会

「気をつけ。これから、朝の会をはじめます。」

①朝のあいさつ

「起立。朝のあいさつ、おはようございます。着席。」

②今日のひにち

「（　）月（　）日（　）曜日、天気は（　）です。」

③けんこうかんさつ

「先生方お願いします。」

④今週の予定とめあて

「○○先生、お願いします。」

⑤リーダーからの連絡

「リーダー、よろしくお願いします。」

⑥朝の活動

「○○先生、お願いします。」

⑦おわりのあいさつ

「気をつけ。これで朝の会をおわります。」

②リーダーからの連絡

リーダー（６年生）からの連絡では，各リーダー（遊びリーダー・生き物リーダー・給食リーダー）や代表委員会に参加した児童が，伝えたいことがある際に，全員の前に立ち話をする。各リーダーに，それぞれ担当の先生をつけることで，リーダーが安心して活動できるようにしている。このような経験を繰り返し行っていくことで，リーダーとしての責任感や自己肯定感・自己有用感が高まり，それが下学年，また特別支援学級全体に良い影響を与えている。

（例）これまでの連絡

遊びリーダー：「木曜日の遊びは〇〇です。〇〇時〇〇分に〇〇に集まって下さい。」
生き物リーダー：「カブトムシは，夏休みの間は〇〇先生がお世話をしてくれます。〇〇先生に会った際には，お礼を言いましょう。」
給食リーダー：「牛乳パックをしっかりとつぶしていないので，片付ける前に必ずつぶすようにしましょう。」
代表委員会に参加した子ども：「今月のめあてが，〇〇に決まりました。みなさん，しっかりと守りましょう。」

③朝の活動

３０秒トレーニングと題して，身体の運動や目の運動等を主に行っている。３０秒という短い時間にすることで，子どもたちも飽きずに集中して取り組むことができている。片足立ちで身体のバランスを鍛える活動では，繰り返し行っていくことで，バランスを崩さずに立っていられる子どもが増えていった。

【帰りの会の取組】

①今日楽しかったことの発表

帰りの会は帰りの時間が揃う学年で行っている。その中で一日を振り返り，全員が楽しかったことの発表をしている。毎日子どもたちは２０秒程度で言いたいことをまとめ，自分から手を挙げて発表している。教師側は子どもたちの振り返りを聞くことによって，子どもが一日をどのように過ごしたかを確認することもできる。

２．生活単元学習

生活単元学習は，「児童生徒が生活上の目標を達成したり，課題を解決したりするために，一連の活動を組織的に経験することによって，自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習するものである。」そこで，特別支援学級では，「①子どもたちの興味，関心に応じたもの，②一人一人の子どもに役割があり，集団全体で単元の活動に協働して取り組めるもの，③身に付けた指導内容が現在や将来の生活に活きることができるもの」，という３つのことに留意をして単元を考え，取り組んでいる。（特別支援学校教育要領・学習指導要領解説・総則編）

例えば，１年生，２年生，５年生が「シャボン玉を作ろう」という単元を行う際，１年生は生活科の「なつをかんじよう」国語科の「せんせい，あのね」，２年生は算数科の「かさ」，５年生は算数科の「比例」という各教科のねらいが含まれている。また，どのようなシャボン玉を作りたいのかを学級で話し合いを

することは，特別活動の学級活動のねらいも含んでいる。５年生は，学習した「比例」を使ってどれぐらいの量の水と台所用洗剤を用意した方が良いかを計算をし，２年生は，それを基に学習した「mL」を使ってシャボン玉液を作った。子どもたちは，自分たちが学習したことを使って，大きなシャボン玉を作れたという成功体験を積むことができた。また，１年生はシャボン玉遊びのことを文章にする学習で，実際に経験したことから書くことを見つけ，教師に話しかけるような文章を書くことができた。このように，実際的・総合的に学習することで，子どもたちが単元の活動に意欲的に取り組み，各教科で学んだことを生かして，粘り強く課題を解決しようと取り組むことができると考える。

（１）体験活動の充実

子どもたちが，いろいろな単元を通して，多種多様な意義のある経験をすることができるように，体験活動の充実を図っている。

①ジャガイモ・サツマイモの栽培・収穫

特別支援学級全体では，ジャガイモ，サツマイモの収穫を行っている。ボランティアの方々に協力していただきながら畑で育て，子どもたちが収穫している。本活動は，各教科・領域に密接に関係している。「国語科」の書くことに関連して，協力していただいた方々へお礼の手紙を書いたり，算数科の「数量」が関係してくるイモの重さを量ったりする活動を行っている。掘った芋を食べることで，楽しさと充実感を味わえる活動となっている。また，教師が芋に関連する本を紹介することで，子どもの興味を引き出すことに繋げている。

【ジャガイモ・サツマイモ掘り】

②季節を感じる学習

季節の掲示物づくりや季節の行事への取組を通して，季節にまつわる語彙を増やしたり，季節の仲間分けをしたり，風習やならわしへの理解を深めたりしている。

【七夕飾り】

【夏祭り】

③生き物を育てる活動

生き物リーダーを中心に，年間を通じて学級もち回りでメダカの飼育を行っている。それぞれのメダカの特徴を見つけ，名前をつけて世話をすることにより，生き物に対する愛着や観察力が育ち責任感が育ってきている。本活動は５学年の理科学習を６年間で行うものである。メダカの世話を通し交流学級との関わりも見られた。

【めだかの名前募集】

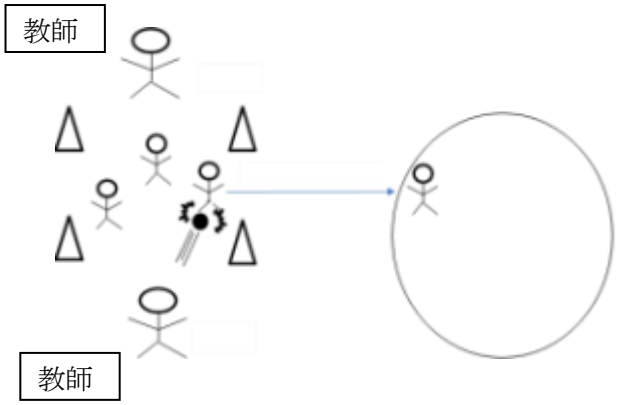
④さざ波交流会（市内特別支援学級交流学習会，令和５年度オンライン開催）

令和元年度まで，館山市では市内の小中特別支援学級合同で様々な活動を行う「さざ波交流会」を毎年開催していたが，令和２～４年度は感染症対策のため行われなかった。令和５年度にはオンライン開催という形で行われ，それぞれの学校で考えたクイズやゲームなどのレクリエーションを楽しんだ。

【さざ波交流会（令和５年度オンライン開催の様子）】

３．遊びの支援

特別支援学級の子どもたちは，集団での遊びのルールが分からず，交流学級に行った際にみんなと一緒に遊べなかったり，ルールを守れずに友だちとケンカになってしまったりする様子が見られた。そこで，遊びのルールを理解することができるように，遊びのルールを簡単にしたものから始め，子どもたちがスモールステップで取り組めるようにした。例えば，ドッジボールでは①当てられたら外野に行く②外野から当てたら内野に戻れる③最後に内野にいた人数の多い方が勝ちというルールがある。これらのルールを一度に覚えるのではなく，一つのルールに絞って遊びを展開する。①のルールを覚える場合は，下の図のように，教師が投げたボールに当たったら，外に出るという遊びを行うようにする。このように，段階的に遊びを行うことで，色々な遊びのルールを覚えることができるようになってきた。



４.リーダーの育成

令和２年度から６年生の子どもたちは，高学年としての自覚を一層育てるため，『なかよし学年』代表委員，生き物リーダー，遊びリーダー，給食リーダーの役を担っている。仕事内容や手順の精選と明確化等の支援を行うことにより，安心してリーダーとしての活動ができるようになる。また，周囲から仕事を肯定

的に評価されるような発表の場を随時設けることにより，自己肯定感・自己有用感を高めることに繋がっている。

（1）代表委員会への参加

代表委員会に，なかよし学年代表として高学年の子ども１名が参加し，月目標の反省を発表したり，月曜日の朝の会でなかよしの子どもたちに報告したりするという仕事を行っている。なかよし学年を代表としているということから，責任をもって仕事を行うことができるようにしていく。

（2）生き物リーダーの仕事

生き物リーダーは，めだかやかぶとむし等の世話をしている。水槽が汚れていた際には清掃も行っている。生き物を育てる活動を通して，リーダーとしての自覚をもつことができるようにしていく。

【めだかのえさやり当番のクラス札を変えている場面】

（3）遊びリーダーの仕事

遊びリーダーは，その日の遊び内容を決め，朝の会で発表する活動をしている。昼休みの遊びの時間では，事前に遊びに必要な道具の用意をする等，責任をもって行動する姿が見られた。雨で遊べない日には，新しい遊びを考えている。どの学年の子どもでも楽しく遊べるように，遊び方やルールを考えることで，自分だけなく，相手の気持ちにも目を向けることができるように繋げていく。

【今週の遊びを掲示する場面】

（4）給食リーダーの仕事

給食リーダーは，下学年の給食の片付けを手伝ったり，汚れたトレイを拭いたりする活動をしている。状況をよく観察し，自分が今すべきことを考える力を養っていく。

【お皿の整理・トレイを拭いている場面】